

二 活動写真もパノラマも、日本の庶民のゴラクであり、近代西欧文明と本質的には相容れないものである。
ホ 世界各国の物資がチンレッツされた万国博は、西欧諸国とそれ以外の国々々が対等の地位になった近代を象徴している。

生死と向き合う

第十二問

次の文章は、南木佳士の小説『ダイヤモンドダスト』の一節である。
マイク・チャンドラーは、ベトナム戦争の従軍経験をもつアメリカ人宣教師で、末期癌を患い、日本のある高原の病院に入院している。香坂はその医師、和夫はそこで働く看護士で、つい先日までマイクの病室には、和夫の父の松吉も入院していた。これを読んで、後の問に答えよ。

① あるかなきかの高原の町の夏が終わろうとしていた。マイクの病室の窓から見える県境の峠の頂^aには、すでに気の早い紅葉が点在し始めていた。

香坂が松吉の退院を急がせたのは、夏のピーク時で病室のやりくりができなくなったためではなく、実はマイクの病態の悪化が予想されたためらしいと気づいたのは、一週間ほどあとになってからのことだった。和夫が病室に姿を見せても、マイクはベッドに横になったまま背を向けていることが多くなった。手のつけられていない夕食のけんちん汁や塩ジャケを見ると、異国で不治の病を得てしまったアメリカ人としてのマイクが衰れに思えて、和夫はかける言葉がなかった。

② それから数日して、和夫が夜勤の夜、マイクの部屋からナースコールがあった。和夫は妙な胸さわぎがして、受話器を取る前に走り出した。勢いよくドアを開けると、マイクはベッドの上にあぐらをかいて肩を大きく上下させていた。カーテンを開け放してある広い窓は、深い森の闇への入口に見えた。就寝用の小灯だけ

〔出典〕
南木佳士
『ダイヤモンドダスト』

〔著者出題歴〕

- ・ センター試験
- ・ 福島大学
- ・ 筑波大学
- ・ 千葉大学
- ・ 京都大学
- ・ 大阪大学
- ・ 国士舘大学
- ・ 中京大学

がとる病室の入口に立つと、マイクがそのままの姿勢ですべるように森の闇に消えて行くような錯覚にとらわれた。たしかに、マイクの背中は驚くほど小さく、軽そうだった。

「どうしました」¹ 和夫は窓とマイクの間に割り込んだ。

「ああ、あなたでよかった」マイクは、蒼白な顔に、口の周囲だけシワを寄せた。話をすると、肉の落ちた目の縁を眼鏡がすべり落ち、一瞬、完璧な老人の顔になった。

③ 「星を見ていたら、たまらなく誰かと話がしたくなったのです。ご迷惑ではありませんか」マイクは眼鏡を右手で押さえながら、頭を下げた。

ベッドの脇の丸椅子に座った和夫は首を振り、窓越しに夜空を見上げた。峠の稜線から視線を上げていくと、黒いシルエットとなつて立ち並ぶ森の唐松の木によじ登れば手の届きそうなところに、白く冷えた星の群れが静止していた。

「ファントムで北ベトナムの橋を爆撃したときの話ですけど……私のファントムは対空砲火を受けて燃料が漏れ、エンジンにもトラブルを起して仲間から遅れたのです。北ベトナムに降下すれば、ゲリラのリンチにあうと教えられていましたから」とにかく海をめざして飛んだのです。トンキン湾沖で待つ母艦まではとても無理でしたけれど、海にさえ出ればなんとかなる、と思って必死でした。日は暮れて、周囲は深い闇でした。燃料がゼロになったとき、座席ごと脱出しまし

た。パラシュートが開いてから、ふと上を見ると、星がありました。とてもたしかな配置で星があつたのです」

マイクは落ちてくる眼鏡をいく度も右手で押し上げていたが、やがて高い鼻の先端にとどめたままにし、顔をのけ反らせて夜空を仰いだ。

「誰かこの星たちの位置をアレンジした人がいる。私はそのとき確信したのです。海に落ちてから、私の心はとても平和でした。その人の胸に抱かれて、星たちとおなじ規則でアレンジされている自分を見出して、心の底から安心したのです。今、星を見ていて、あのときのやすらかな気持ちを思い出したかったのです。誰かに話すことで思い出したかったのです」

④ 話し終わると、静脈の浮くマイクの細い首から、タンのからむ嫌な音が聞こえ始めた。

和夫は肩を支え、マイクをベッドに横たえた。掌に背骨が直接触れる背を、静かにさすり上げた。

「とてもいいお話ですね。こんな感想しかないのが申し訳ないくらい、とてもいいお話ですね」

呼吸の荒さがおさまってきたのを見て、和夫はマイクの背から手を放した。

「検査の技術が進歩して、癌患者の予後が正確に分かるのに、治療が追いついていない。このアンバランスはきつと、星のアレンジをしている人が、自分勝手に

死さえも制御できると思いあがった人間たちに課している**試練**なのだと思います。今、とても**素直**な気持ちでそう思う……**思いたいのです**」

マイクは気管の奥に落ちついたタンを再び騒ぎ出させないように、とてもひくい声を用いていた。

⑤ 「よく分かる気がします。どうですか、眠れそうですか」和夫も声をおとした。「ありがとう。おかげで休めそうです。**ところで**、松吉さんは水車を造っていますか」マイクは眼鏡を取り、毛糸の帽子で目隠しをした。眠ろうとしているらしい。

「みんなで大きいやつを造っていますよ」

和夫はマイクに松吉が水車を造ると言い出したわけを聞きたかった。

眠りにおちそうなマイクに**遠慮**して和夫が質問できないでいると、マイクは帽子で目を隠したまま語り始めた。

「松吉さんの運転する電気鉄道が一番電車が、高原のツツジの原を走っていると、月が火山の上に出ていて、その月が沈むまで見ていられたのだそうです。ゆっくり走る電車だったのですね。森の香につつまれて電車を運転する時間を松吉さんはとても大事にしていたのです。脱線しても誰もケガをしないスピードの電車を、体の一部のように**愛**していたのです。**だから**、松吉さんは廃止の噂の出た鉄道になんとかたくさんのお客様を呼ぼうとして、森のすべての駅に水車を造ろう

3

と**提案**したのです。実現していたら、今でもたいした人気でしょうねえ。でも、県境の駅に造り始めた水車が完成する寸前に鉄道は終わったのだそうです。水車の回る駅から、松吉さんの運転する電車に乗って、ツツジの原の上に出る月をながめて、ながめてみたかった……」

マイクの語尾が次第に消え入るとともに、浅い**寝息**に変わっていった。

和夫は窓のカーテンを引かずに、そっと病室をあとにした。その夜、彼は二時間おきにマイクの病室をのぞき、彼の寝息が窓の外の強い吸引力を秘めた闇にからめとられていないかと耳をすませた。

⑥ マイクの病状は日ごとに悪化し、酸素吸入が始められた。回診に和夫が付いたとき、香坂は、**流暢**な英語で質問をした。
「十分に聞きましたか」

香坂はマイクの咳がやむのを待って、洗練された微笑を浮かべた。

[Yes, Thank You.]

握手を求めて差し出されたマイクの骨と皮だけの手首を、指の長い香坂の手がつかんだ。
しばらく握り合っていた手を放すと、香坂は窓の方を向いて、大きく口を開いて音を殺したため息をついてから、病室を出て行った。

「もうすぐ水車が回ります」和夫はマイクの耳もとでささやいた。

4

「それはいい。松吉さんはいいなあ」マイクが初めて涙を見せた。

「マイクさんも早くよくなって、見に来て下さいよ」和夫は折り曲げた腰を伸ばし、軽くマイクの胸もとに手を置いた。

4
「とてもいいなぐさめを、ありがとう」

和夫が耳で聞き、掌に感じたマイクの最後の言葉だった。

傍線部 a ~ c の漢字の読みをひらがなで答えよ。

a

b	
---	--

C

問二 傍線部1「和夫は窓とマイクの間に割り込んだ」とあるが、後の場面でも、和夫はこれと同様の意味をもった行動をしている。それが描かれているのはどこか。
最も適当な一文を抜き出し、その最初と最後の五字ずつ（句読点なども字数に含む）を答えよ。

問三 傍線部2「星を見ていたら、たまらなく誰かと話がしたくなったのです」とあるが、マイクが「誰かと話がしたくなった」のはなぜか。本文に即して八十字以内で

説明せよ。

[illegible]

問四 傍線部③「松吉さんは水車を造っていますか」とあるが、マイクがこのようにいったのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ潰えかけている自分の命のことを考えるにつれて、暗澹とした気分になり、退院した松吉のことを思い出したから。

口 和夫の話を聞いているうちに、松吉の将来のことを予感し、漠然とした不安を感じてきたから。

ハ 自らの過去を振り返り、自然と人間の望ましい関係について思いをめぐらすうちに、松吉のことが心に浮かんだから。

ニ松吉とは違つて悔いを残したままに終わりそうな自分の闘病生活を、あらためて省みることになったから。

ホ 自分の病気をなんとか克服できそうだという思いを、いまいちど確認したいと

いう気持ちが生じてきたから。

問五

傍線部4「とてもいいなくさめを、ありがとう」とあるが、こう言っているとき
のマイクの気持ちを説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、
記号で答えよ。

イ すでに自分の死期を悟っているため、和夫のなぐさめの言葉は何にもならない
と思っではいるが、優しい気遣いを見せてくれる和夫の配慮には感謝し、その配
慮に対して礼をすべきだと考えている。

ロ 松吉の話を通じて病気を克服するために闘うことの大切さをそれとなく説い
てくれている和夫の言葉を聞き、彼への感謝の念を表明するとともに、自分も病
気と闘っていかうと決意をあらたにしている。

ハ 治る見込みのない自分とは対照的に、病気を治癒して夢を実現しようとしてい
る松吉についての話を聞いて、表向きの感謝の言葉とは裏腹に、心の底では鬱屈
した思いを抱えている。

ニ 自分の大事にしていたものを守ろうと尽力していた松吉が一応の目標を達成
しそうだという話に心を癒されるとともに、その話をしてはげましてくれた和夫
に感謝し、死を穏やかに迎えようとしている。

ホ 病氣と闘ってきたにもかかわらずそれを克服できなかったという無力感に苛
まれ、虚無的な気持ちになりながらも、生への執着を捨て去り、自らの死をあり
のままに受け容れようとしている。

問六

本文の内容・表現についての説明として、明らかに誤っているものを、次の中
から二つ選び、記号で答えよ。

イ 随所に挿入された回想場面が、マイクを見守る和夫の内面を鮮やかに描き出
している。

ロ 高原の美しい自然や季節の風物についての描写が、効果的に話を彩っている。
ハ 死期を迎えたマイクの言葉からは、彼の世界観のようなものがうかがえる。

ニ 登場人物たちの穏やかな態度が、死を描いた話全体をより静謐なものにしてい
る。

ホ マイクと松吉というまったく対照的な考えをもった二人の人物を軸にした話
である。

ヘ 医師と看護士の、一人の患者の死に真摯に向き合おうとする姿が描かれてい
る。